

兼葭堂雜錄 〓 木村孔恭稿・曉鐘成撰
文會雜記 〓 湯淺元禎
閑窓瑣談後編 〓 佐々木貞高
畏庵隨筆 〓 若槻敬

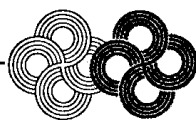
14

日本隨筆大成

第一期

吉川弘文館

日本随筆大成 第一期 第七卷
昭和二年十月廿八日発行
編纂者 日本随筆大成編輯部
代表 早川純三郎
発行者 吉川半七
発行所 日本随筆大成刊行会



日本随筆大成

〈第一期〉 14

昭和五十年十二月五日 印刷
昭和五十年十二月二十日 発行

編者 日本随筆大成編輯部

発行者 吉川圭三

発行所 株式会社 吉川弘文館

〒113 東京都文京区本郷七丁目二番八号
電話東京八一三—九一五一（代表）
振替口座東京二四四番

製作 株式会社 たんちよう社

解題

本集には、兼葭堂雜錄、文会雜記、閑窓瑣談後編、畏庵隨筆の四種を収める。

兼葭堂雜錄 五卷

曉晴翁撰

木村兼葭堂孔恭の藏儲の書籍其の他珍品の多かった事は、当事の好事家の羨望する所であった。初代兼葭堂は享和二年正月二十五日に歿した。幕府は早速その家人に命じて、その書籍、物産類の目録の上納を命じた。初代兼葭堂には男子の相続人がなかった。そこで親類共は相談の上で、その甥坪井屋吉右衛門方同居吉兵衛を養子として、跡目相続をせしめた。これが二月二日の事で、二代目兼葭堂石居が其人である。奉行所はこれより以前既に兼葭堂藏書上納の詮議があった事として、この養子相続の許可と共に、書籍物産類の目録書を差出す命令を下したのであった。孔恭は生前自分以外は妻妾二人の外には一切、書籍を始め奇玩類の取扱いを委せなかった事は有名である。兼葭堂石居にはこの幕府の命令の延期を願うより他はなかった。それでも、四月二十九日に書籍物産類の目録を製作、奉行所に提出、それから三年越の文化元年、書籍等を上納、五月十九日には金子五百両の請書も提出して、この事件は終了している。これらの書籍は昌平黌に収められ、内閣文庫資料館へと引継がれて現存している。この記事は、高梨光司著『兼葭堂小伝』よりの記事の抄出であるが、高梨氏は兼葭堂の藏書は二万巻と云われ、上記の目録のものは寧ろその一部と見るのが至当であろうとし、他の例をも挙げておられるが、この兼葭堂雜錄もその一つの現われであろうとしておられる。

さて大変前書が長くなり過ぎたが、暁晴翁が四代目兼葭堂主人の依頼によって、安政三年に本書を成す前に、兼葭堂の所蔵書籍等に此れだけの増減があった事は認めねばなるまい。然し本書は勿論、暁晴翁の面白しとする物を選んだもので、兼葭堂及び其の周囲の人を調べる時にも一応査査に必要な記事は、巻初の兼葭堂孔恭伝を初めとして、売茶翁画記、高芙蓉、池大雅など多くの興味ある記事があり、当時大いに人々にもてはやされた藤原経房卿物語と称する安徳天皇伝説なども取入れられている。画図は大阪の画人翠栄堂松川半山の筆に成るものである。資料を兼葭堂木村家にもとめ、暁晴翁撰としてまことに応わしい随筆と云う事が出来よう。享和年間より後は石居のたくわえる所なり、と著者は兼葭堂雜録概略に云っている。私は第一期第三巻の『雲錦隨筆』の解題を草するに当って、畑銀鷄著『銀鷄雜錄』の中の記事を引用したが、再び同書より二代目兼葭堂石居に就いての記事をここに抄記しておく。

伏見町

好事家

兼葭堂石居

姓質朴にして風流大一人の人也。煎茶を好んで、毎月廿五日に会あり。売茶翁の所持の茶器は、おほくは此家にある。此兼葭堂ぬしの父なる人は、海大一人の好事家にして、風流は此人に増りたる者、高麗唐土にもまたあるべからざるとぞ思はれぬ。其ゆゑは世間の雅客、ひとたび家に入りて其珍藏を一覧して、余が言の浮ならざることを知り給ふべし。実に浪華に名高きことおほくは人の知る処也。毎年七月二日三日に珍物を出して、土用干をなし、諸人に見せしむ。

これは銀鷄が元保五年霜月初、浪華の旅亭で草した記事である。

兼葭堂も四代と云う人は未詳であるが、石居までは、宮武外骨編『浪華名家幕所記』に、「木村石居、名孔陽、字世輝、俗称吉右衛門、兼葭堂の男」として挙げてある。墓は大阪東区小橋寺町大応寺

の木村家の墓域である。なお『石居印譜』一卷が刊せられていて、静嘉堂文庫に蔵せられている。本書は刊本が諸所に伝えられているが、再刊に当っては国会図書館本によって比較した。活字本としては、『日本随筆全集』五、及び旧大成本第一期第七卷本に依って流布している。

暁晴翁（木村明啓）に就いては、本大成第一期第二卷「尚古造紙挿」及び同第三卷「雲錦隨筆」の解題に小記したので見られたい。

文 会 雜 記 三卷、附録二卷

湯 浅 常 山 著

本書は服部南郭の門人である著者が、寛延二年（四十二歳）と宝暦三年（四十六歳）等に江戸在府中、服部南郭、松崎觀海等多く古学派の人々の話を聞くにまかせて、順次もなく書き留めた隨筆である。其の話の内容の生々しさと作為を交えない記述が本書の面目で、その素材の整理されていない所が亦魅力をもなしている。当時の学者の逸事、書籍談など、興味深いものが多い。本書は読書家の中に多く読まれたと見るべきであろうか、国立国会図書館其の他多くの図書館に写本として蔵されている。活字本として流布したのは『日本随筆全集』二、『日本文庫』二卷及び七卷、旧大成本第一期第七卷等によって流布している。なお森銑三氏は日比谷図書館蔵『文会雜記拾遺』一卷の写本を著者未詳として紹介せられている。これは『玉石雜纂』と云う書物に収められており、内容は文会雜記と同調ではあるが、拠に作者を松崎堯臣や湯浅元禎と定める事を差し控えておられる。

本書再刊に当っては、国会図書館蔵三冊本の浅野梅堂旧蔵本（本書には朱註あり）、内閣文庫蔵二冊本「浅草文庫」本、及び明治十年の写本四冊等を参照して校合、補記等を施した。

湯浅常山 名は元禎、初名俊真、字は之祥、初め本三郎と称し、のち新兵衛と云う。常山の号で知

られている。代々備前岡山藩士で、父は亦右衛門英と云い、常山は享保十六年、二十四歳で家を継ぎ、大組に編せられ禄四百石を賜った。一時寺社奉行や町奉行を勤めたが、明和六年八月江戸に居たのを召還され蟄居を命ぜられる身となった。蓋し重臣に忌まれた為だと云う。天明元年正月九日、七十四歳で歿し、岡山の在なる平井山に葬られた。右は其の官歴の略である。常山の世に名を高からしめているものは、『常山紀談』其の他著述の方面である。今学者としての常山を顧て見ると、常山は文武両道に励んだ人であるが、文武いずれかをやるなら、文を捨てよと主張する人柄であった。国にあった時から、古学を尊び藩の要路に居る程朱の学を奉ずる人々とは合わなかった。享保十七年初めて江戸に下った時に、服部南郭の門に入った。而して最も親しかったのは、丹波篠山の藩士松崎君修、号観山である。常山が江戸に下ったのは、享保十七年(年二十五)、寛延二年(四十二歳)、宝暦三年(四十六歳)、同十年(五十三歳)、明和五年(六十一歳)の五回である。文会雜記の資料は多く此等の間に書留められたものであらう。常山は儒学の外に国史にも興味を持っていたので、大著『常山紀談』が成るのであるが、此れは既に森銑三氏の解説が岩波文庫本にあり、角川文庫本にも鈴木棠三氏の解説があるので、ここには除くことにする。只『南天莊樸筆湯浅元禎略伝』の末に、森銑三君抄出として、吉田篁墩著『文峰手管』の記事を載せておられるのを記して、この稿を終わりたいと思う。

吉田篁墩が立原翠軒に贈った書状中に、

備前土肥も勤役の初より俗人どもに忌まれ候て、一生蟄居にて終申候由、湯浅新兵衛も蟄居にて果て申候。とかく書物ほど人の祟をなし候者は無之不堪一笑候。乍去備前の家風は禄など減じ候事は無之由、よき風にて御さ候。二士ともにかつて不屈撓二著書考究之由、是又不堪快慕候。

篁墩、翠軒、経平、常山と書物好きの間に流れる気分が観取せられて、それこそ不堪一笑であ

る。

閑窓瑣談後編 二卷

佐々木貞高 著

本書は本大成第一期十二巻に前編を収めたので、其節一応の解題を草したから、同書を見られたい。一応厭かしめず読了せしむる本書は作家の随筆であるからであらう。

畏庵随筆 二卷

若槻敬 著

本書には文政辛巳（四年）正月の著者の自序がある。これによって見ると、

著者は幼少の頃から、読書を好んで一日も手より書をはなはず、閑暇の節、筆のまにまに書留めたものが年月を経て、うづだかくなつた。人皆心こころなれど、天分のたのしさ掻破捨てるものゝび難く、百が一つにつゞめて巻を二つとし、この序を草したとある。著者は山崎派の儒家で、和漢の書に目を曝した人だけあって、文章も、極簡淨であつて、所謂漢学先生の講説を含むような随筆を読むのと事変り、文事を解し雅情の仄見える筆触である。上巻を歳時、教学、撰養に分ち、下巻を国籍、古紀、風詠に分つて小文を草している。唯「古紀」に、宝永のすえ日本書紀の古巻を見て、校本と比較考訂に備えている所は他の部分と異なるが、何れも著者の人柄も偲ばれる随筆である。一例を挙げれば、「いつてしも光陰の惜しからぬかは、まして年の暮る名残をや。たゞ心身を恬静にして、青春の到るをこそ迎へめ」、「学問は実厚にして博洽を貴ぶ。偏固を実厚とし、泛濫を博洽とするは違へり」等によって、本書の大様は窺われよう。

若槻幾斎については、其の伝、諸家に記述されている者が少ない。幸いに『森銑三著作集』別巻に

「若槻幾齋」なる一文があつて、『春水遺稿』に附載の「師友志補遺」に、山陽の一文があるのを挙げておられるが、今また此を抄写して其の人の大様を記したい。

若槻幾齋先生、名は敬、字は子寅、本京師角倉氏の屬吏なり、辞して儒師に爲る。人となり沈黙寡言にして聞見極めて博く、一世を不可とす。拙齋翁（西山正）嘗て戯れに、先君に謂ひて曰く、子寅を推して心と為さば、程朱復た生ずと雖も、或は恐らくは輕しく合せざらん。而して独り君が家の兄弟に許すは何ぞ哉と。家は聖護院村に在り、謂はゆる環堵蕭然、簞瓢屢々空しくして、晏如たる也といふ者。大府金を賜ひて褒異す。蓋し京儒を風励する也。

この大府より賞せられたのは文化九年幾齋六十八歳の年であつた。幾齋の事は松平樂翁侯の臣広瀬蒙齋の著『有方録』寛政八年六月二十二日の条にも訪問記事が見え、これに幾齋は崎門学派の徒である事が知られ、又『大熊言足（国学者青柳種信門人）紀行』に、其の住居の様子が見られるので、これも抄記しておきたい。

若槻幾齋を訪ふ。筑前の者兩人参たるよしいひ入たれば、やがてこれへ通れといふ。鋪台より行くに、板張やぶれて甚あやうし。一間にとほる。此処に尊朱学舎といふ額をかかげたり。畳ふるび、壁などやぶれて、いと手さむし。やがて先生出たるを見るに、いとやせたるがふるきはかまをきたり。さて添書はといふ。添書はなきよしをこたふ。添書なければあはぬものをとおもひたる顔つきいとおかし。父子ともに物かきてあたへたり。

以上は森銑三氏の「素材録」の記事の抄記である。この「素材録」にはなお幾齋と高山彦九郎との関係やら、畏庵随筆、其の他の著述についての記事もありますが、今は割愛して、山本東海編『平安名家墓所一覽』の幾齋及び其の子息整齋の記事を抄記して、この稿を終りたいと思う。

若槻幾齋墓

名敬 字子寅
文政九年十一月廿六日

八十一

東山延年寺墓

同 整齋墓

名皐 字子光
天保七年五月十三日

六十八

同

目次

蒹葭堂雜錄……………一

文會雜記……………一三

閑窓瑣談（後編）……………三九

畏庵隨筆……………四三

（解題 丸山季夫）

前曉晴翁撰
松川半山畫

全部五冊

蕉段堂雜錄

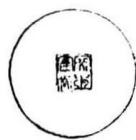
攝都書肆

五書房合梓

緒言

夫學做詩、學做賦、學詠和歌、而雖欲成名於天下、非由此而識字、由此而明義、由此而知聖賢之道、可至此道難焉、先哲皆以明經爲最末文學也、宜哉、蓋此書所載者、吾邦所有之靈社、吳場珍說奇談、所見問之、及所口碑之傳、舉而編也、實兼葭堂之賜、而書肆文斛堂之成功也、閱者或誹謗此書、而謂不足用、歟、然天下之豈是中有非、非中必有是、無全是、無全非也、因是見是被、叫風雅奇人者、必讀了此書、豈謂無于小補哉、

竹藪



兼葭堂雜錄 概略

兼葭堂遜齋翁は浪花一奇の人たる事、世に普く知るところにして、四方の旅客当津に遊ぶ者、此を訪はずといふ事なし。さる程に海内の国々において知己あらずといふ事なく、其数挙て枚ふべからず。故に其遠近より、産物の稀品を贈り、或は図をうつし、其余奇談珍說何にまれ見聞の珍らしきは、悉く告來るをもて、書翰の往復毎に繁く暇日さらに有ことなし。されば其家に蔵する書翰絵図或は自ら見聞の筆記等、今尚櫃に充滿せり。一日當時の兼葭主人〔割註〕四代目吉右衛門。予に語て云く、先々よりの書画筆記、疎にせず秘蔵せり。さりながら吾年来思ふに、其多かる中には必らず家に秘をきて益あるもの、或は世人に見せて慰めとなるべきもの、將益なくして反古となすべきもの、無にしも非ずかし。然れども我活業に事繁くして、これを調ぶるの暇あらず、空しく月日を送りぬ。足下幸ひに老の慰みかた／＼撰み給はぶ、こよなきわが悦びなりと、只管の頼みに任せ、殊に好めるわざなれば、五月雨降そぐ徒然。彼もとにいたり取出させ、其あらましを差別なす折から、書肆文魁堂の訪ひ來りて、此ありさまにいちはやく、其珍らしき事どもを梓にものせんと、主人をすゝめ予に談ふ。実其趣向もつともなり。されば其志あらんには、凡天人事の部をわけ、次列をも糺して後、然るべしと論するに、書肆の風にて唯其遅々するを好まず、片時もはやく刻せんことをはかるのみなるに、制しがたくて其意に応じ、手にあたるまゝ分たるを、直に写しつけて草稿をなし与へぬ。されば木に竹を繼たるごときの事あり。又年歴の前後なすもの

あり。見客其杜撰を見許し給ふべし。且享和年間より後なるものは、二代兼葭堂石居の、たくわへる所なり。是亦あやしむべからず。原来予が撰集などしるさんは、おこがましきわざなれば、数固辞といへども、書肆の許さずして、終に愚名を書添るにこそ。

安政三年辰水無月

暁　晴　翁　誌